『農夫ピアズの幻想』における
'Kynde Knowynge'と「想像力」*

辻　　康哲

14世紀後半に書かれた『農夫ピアズの幻想』(*Piers Plowman*)[1]は，語り手である「夢見る人」Wil の魂の救済をテーマとしていると考えられる。彼は，いかにしたら魂は救われるかを模索し続ける。この魂の救済とは即ち，神（Truth）を「知る」ことと，おおよそ言い換えることができるように思われる。この広汎な，神を「知る」という主題は，この作品中では総括的な用語として 'kynde knowynge'（「生来の知識」）と表現されている。「生来の知識」という句は，早々と作品の冒頭近くに登場するものの，そのはっきりした定義は最後までなされないままで終る。従ってそれは読み手の解釈にかかるわけであるが，後半 *Vita* の冒頭に現れる〈知性〉(Wit)，〈勉学夫人〉(Dame Studie)，Imaginatif——以下〈予知力〉と翻訳する——らによって論じられる「知識」の問題と深いつながりがありそうである。その中で特に，〈予知力〉が重要な役割を果たしていると思われるため，「生来の知識」と〈予知力〉との関連性に注目すべきであろう。従って，この小論では，Wil の神を「知る」というテーマは，その一面において，「想像力」によって説明できるのではないかということを考察する。そしてラングランド（William Langland）が重視するこの「想像力」は，アヴィセンナやリカルドゥスなどが築いてきた，中世の哲学・キリスト教の伝統に根ざしたものであると考え，彼らの思想と〈予知力〉とがどのようなかかわりを持つかも調べてみる必要がある。

「生来の知識」がこの作品全体を貫くテーマであることを最初に指摘したのは Mary C. Davlin[2]である。Wil が Dowel を求める場合，*Dowel* において彼が欲しているものは皮肉にも，「百科事典編集者のような公平で客観的な知識」であった。しかしながら，彼が本来求めるべきもの，即ち「生来の知識」は，「愛による，心からの，専心的な知識」であり，

これは*Dobet*になって初めて獲得されることになる。Davlinはまた別の論文[3]で，「生来の知識」とは「神の知恵」であり，個人的に神を「体験する」ことであって，書物などから知識を得ることとは異なると述べている。さらにBritton J. Harwood[4]は，オッカムの用語を引用し，「生来の知識」とは「明白な知識」であり，「直観的認識」であると解釈する。即ち，Wilは，「存在するものとして直接に知り得る，存在する個々の対象」を求めているのである。一方，〈予知力〉に関しては，H. S. V. Jones[5]が早くも1914年に，リカルドゥスの『ベニヤミン』及びフーゴと，〈予知力〉との関連性を指摘し，想像力は感覚と理性との仲立ちをするものであることに注目している。Harwood[6]は，〈予知力〉とは，「類似物を把握し，それをメタファーとして理解する能力」と解釈するが，その一方〈予知力〉は，神を「知る」こと――「生来の知識」――に充分役立つものではないと結論づける。Alastair J. Minnis[7]は，リカルドゥスの『小ベニヤミン』などで大きく取り上げられている「想像力」(*virtus imaginativa*) の意味を紹介する。そして〈予知力〉は〈理性〉の援助者であること，聖なる教会の教えを信仰することがいかに重要かを〈予知力〉は表す，と述べている。Ernest N. Kaulbachは最近，〈予知力〉に関して二本の論文を発表している[8]。それによると，〈予知力〉は「〈理性〉の代弁者」である。この場合の「理性」は，〈思考〉(Thought) として描かれた人間の普通の理性を表すのではなく，人間の中の動物的理性のことである。これによってWilの心はDowelへと動く。またKaulbachは，アラビアの哲学者「アヴィセンナによる*vis imaginativa*」が持つ「予言的」能力に注目している。自然から得た知識は超自然的知識――Dowel――に移行させなければならないということを，〈予知力〉はWilにわからせるという予言的役目を果たしている，と述べる。

I

最初に，中世の哲学・神学において「想像力」はどのように扱われていたかを考察する。主に，12世紀の神秘主義者リカルドゥス (Richardus of St-Victor) 及びペルシアのアヴィセンナ (Avicenna) の作品について調べてみる。リカルドゥスの『小ベニヤミン』(*Benjamin Minor*) は，中期英語の抄訳[9]が10あまりの写本に現存する。そしてそのテキストは，

やはり神秘主義の作品である『不可知の雲』(*Cloud of Unknowing*) の写本の中に混存し，これ以外の4編の観想に関する論文と共にまとまった作品群を形成している。これらの写本はもともと14世紀後半，イングランド中部地方の中央東部で書かれたものと考えられている。従ってリカルドゥスの思想は，これらのテキストと同時代に書かれた『農夫ピアズの幻想』に少なからぬ影響を与えたであろうと思われる。ラテン語名でAvicennaとして知られているibn-Sina (980-1038) の作品は元来アラビア語で書かれていたが，まずスペイン語に翻訳され，さらにそれからグンディサリヌス (Gundisalinus) らによって12世紀中葉以降ラテン語に翻訳された。アヴィセンナのラテン語訳は，トマス・アクィナスの『神学大全』Ia Q 78で引用されていることからもわかるように，中世の哲学・神学における「想像力」の伝統の源を開いたものだと思われる。

『小ベニヤミン』[10] は，旧約聖書「創世記」の中の，ヤコブと，その妻と子供たちとの物語を寓意的に解釈し，完徳に至る過程を述べたものである。ヤコブとラケルとの間に生まれた最後の子ベニヤミンが，神の認識と愛の最高の段階を寓意的に表す。神として描かれるヤコブの二人の妻レアとラケルは，それぞれ「愛情」と「理性」とを表す。さらに，この妻たちにはそれぞれの召使がいる。レアの召使ジルパは「感覚」を表し，ラケルの召使ビルハは「想像力」を表す。『農夫ピアズの幻想』の〈予知力〉を考える場合問題となるのは，特にラケルとその召使ビルハである。「想像力」と「理性」との関係について，リカルドゥスは第14章で次のように記述している——

> まだ神の勉強に無知な現世的精神が，目に見えないものの理解に達し，目をあの観想に定めることがいかに難しいか，いやむしろほとんど不可能であるかを誰が知らないであろうか。と言うのは，そのような現世的精神はこれまで物質的なもの以外何も知らなかったからである。それは，考えることに慣れているもの以外を，即ち目に見えるもの以外をこれまで考えることはなかった。それは，見えないものを見たがるが，見える物々の形以外に姿を見せない。それは，非物質的なものを熟考したいが，物質的な物々の像以外夢に見ない。……現世的精神は，非物質的なものを知性の純粋によってまだ見ることができないので，想像力によって熟考する。私が思うに，

このような理由でラケルは自分で子供をもうける前に，召使からまず子供らを得た。なぜなら，ともかく想像することによって，その子供らを記憶にとどめることは彼女にはすばらしいことだから。彼女はその子供らをまだ理性によって理解することはできない。我々はラケルによって理性を理解するように，彼女の召使によって想像力を理解する。従って，ともかく本当の善い物々を熟考すること，つまり，偽りの欺瞞的な善に思考を固着させるより，ともかくある程度想像上の美によって魂がそれらを欲するように魂を刺戟することが，いかに適切なことかを，理性は説いている。そしてこのような理由でラケルは自分の召使を自分の夫に引き渡した次第である。これが，すべての初学者にとっての目に見えないものの観想に達する第一の道であることは，このような知の経験によってすでに陶冶されている者なら誰でも知っていることである。

ヤコブはラケルに子供を産ませる前に，召使のビルハにダンとナフタリの二人の子供を産ませる。神に無知な初学者の魂が，目に見えない非物質的なものを理解し，観想することはほとんど不可能なことである。しかし可能であるのならば，「想像力」によって非物質的なものを観想するのであって，「理性」によるのではない。ビルハがラケルの召使という低い地位に置かれていることは，「想像力」は「理性」より下位の機能であることを意味する。初学者が超自然的な神を観想する場合，「想像力」の果たす役割は，上級者にとっての「理性」のそれと同等に重要なものである[11)]。

リカルドゥスはさらに，この「想像力」は「動物的想像力」と「理性的想像力」とに分けられることを，第16章で説明している。

しかし，ビルハの息子たちについて言うべきことを続けると，知るべきは動物的想像力と理性的想像力である。しかし，動物的想像力はヤコブの息子たちの中に含められるべきではない。またラケルがそれを養子とみなしたく思ってもそうすべきではない。従って動物的想像力は，少し以前に我々の見たり，行なったりしたものについて，何の役に立つこともなく，少しも熟慮することもなしに，散漫な頭の中であれこれと思いめぐらすときのものである。とにかくこ

れが動物的想像力である。というのは，動物はこれができるから。一方，理性的想像力は，肉体的感覚によって我々が知っているものから，我々が何か想像力によるものを作り出すときのものである。例えば，我々は金も家も見たことがあるが，金の家は見たことがない。それでも望むなら金の家を想像することはできる。しかしとにかく動物はこれができない。ただ理性のある生物だけができる。我々は，将来の生活が善か悪かをより注意深く調べるとき，しばしばこの種の想像力を用いる。……従って，現世の肉体的感覚が経験する多くの善と悪とによって，最高の善と悪とは来世ではどんなもので，いかに大きなものであり得るかが推し量られ，この想像力から将来のある像が作られるとき，ともかくそのような理性的想像力がふさわしいことが明らかとなる。……

「動物的想像力」が，心の中で無益にあれこれと思いをめぐらすだけであるのに対して，「理性的想像力」は「理性」そのものにつながるものとして重要である。この「理性的想像力」はビルハの子供であるダンとナフタリとして寓意化されている。ダンは「将来の悪を熟考すること」，ナフタリは「将来の善を熟慮すること」と書かれている。この世には善も悪も渾然一体となって存在するが，人間は，感覚を通して知るこの世の善と悪とから，来世における善と悪とを区別できる。将来の善悪をそれまでに経験したものから判断できる機能が「理性的想像力」であり，人間以外の動物には備わっていないものである。リカルドゥスのこの説明によれば，「想像力」は，自然にあるものを見ることにより，超自然的な目に見えないものの像を心に描き，未来のことを予知する能力と言うことができる。

ラテン語で *Liber de Anima*[12)]（『デ・アニマ』）と題されたアヴィセンナの作品の中には，魂の機能の分類を述べた箇所がある[13)]。「想像力」を人間の頭の機能の中に位置づけるうえで，アヴィセンナのこの分類はきわめて明快であり，影響力の大きかったものであろうと思われる。「魂」は「自育的魂」，「感覚的魂」，「理性的魂」に大きく三つに分けられる。その「感覚的魂」はさらに「運動」と「把捉」の機能に分けられる。またさらに，「把捉」には「外的把捉」と「内的把捉」とがある。「外的把捉」が視覚・聴覚などの五感を指し示す一方，「内的把捉」は，ここで

問題となっている「想像力」を含めて五つの機能から成っている。即ち，まず，前頭部のくぼみに位置し，五感によって伝えられたすべての印象を受け取る「表象力」，前頭部のくぼみの端に位置し，「表象力」が受け取った印象を保持する「想像力」，頭脳の中央部のくぼみに位置し，「想像力」によって保持された像を好みに応じて組み立てたり，組み合わせたりする「想像能力」，頭脳の中央部のくぼみの頂に位置し，五感では知覚できない「志向」(*intentio*) を理解する「評定力」——なお，『志向』とは，例えば，牝羊が狼を見たとき逃げなければならないと感じるようなものである。——そして最後の機能である「記憶力」は，後頭部のくぼみに位置し，「評定力」によって受け取った「志向」を保持するものである。なお，このうちの第四の機能「評定力」は，人間に関する場合は「思考力」と呼ばれる。

アヴィセンナによるこのような魂の機能の分類は，概ねそのまま，『デ・アニマ』のグンディサリヌスによる要約やトマス・アクィナスの『神学大全』に引き継がれている[14)]。外的刺激を「内的に把捉する」魂の機能において，重要な役割を果たすと同時に，扱いのうえで混乱を引き起こしやすいものが，二種類の「想像力」である。『神学大全』Ia Q 78 A 4 の当該の箇所に，「個別的理性」(*ratio particularis*) への言及がある。人間を含めたあらゆる動物は，物の「形相」(*forum*) を知覚できる。ところが，人間以外の動物は「形相」ではなく，そのもの自体が有益であるかそうでないかという「志向」を知覚する場合，「本能」(*instinctus*) によるのに対し，人間は「類推」(*collatio*) による。人間は，五感によって知覚し受け取ったものを類推し，またそれを分割させたり複合させたりして，今後の自分の生活にそれが役立つか，そうでないかを判断できる。この機能が「個別的理性」であり，結局それは，アヴィセンナの用語を用いるならば，「想像能力」あるいは「思考力」である。そして，トマス・アクィナスの「個別的理性」，あるいは「想像能力」・「思考力」と呼ばれるアヴィセンナが定義する魂の機能は，アヴィセンナ自身によって分類された「自育的」，「感覚的」，「理性的」のそれぞれの魂のうち，「感覚的魂」に属する。このことは先に触れた機能の分類で明らかである。しかしながら，ここで慎重な論究を必要とする点は，そうであるにもかかわらずリカルドゥスやトマス・アクィナスは，この魂の機能を「理性的魂」の範疇に含めているかのように思われる点である。実際，これ

ら中世の医学者や哲学者が定義する「想像力」と「理性」との境界線は極めてあいまいである。『農夫ピアズの幻想』の「予知力」を解釈する場合，ラングランドの考える「想像力」はどの程度「理性」に寄っているかという重要な問題を解決しなければならない。しかし，アヴィセンナが分類するように，元来「想像力」は外的刺激の知覚に由来するものであり，「理性」とははっきり区別されるべきものであることは，見逃してはならない。

「想像力」が属する「感覚的魂」の範疇の中で，最も根本にあり，すべての端緒となるものは五感である。我々人間は，五感を働かせ，まさに見たり，聞いたり，触れたりしたものをもとにして，実際には目に見えない超自然的なものを見る機能を身につけられる。この機能が「想像力」と言うことができる。ところで，古くは古代ローマのキケロが，記憶術と五感との関係に言及している[15]。これはギリシアのシモニデスの発見に負うのであるが，五感によって心に印象づけられたものこそが最も完全な像となって心に残ること，その五感の中でも視覚[16]が最も鋭いこと，従って実際には見られないものや考えの及ばないものは，その視覚的な外形を思い描くことにより，その記憶が可能なことを述べている。つまり，記憶の有効なテクニックに視覚化があるということである。五感，特に視覚によって心の中に保持した像は容易には消えず，「内的把捉」を引き起こし得る。しかしながら，'Coveitise of Eighes'（〈目の欲望〉）がそうであるように，五感は欲求をただ呼び起こすだけの不結果を招く場合と，アヴィセンナの用語を用いるならば，「想像能力」や「思考力」や「記憶力」を喚起する場合との，善悪二面を持つ。「感覚的魂」の「把捉」の機能において，比較的動物的な五感は，比較的高等な「想像力」にとって不可欠なものであり，両極端なこの両者を以てひとつのヒエラルキーが形成されている。

II

さて，『農夫ピアズの幻想』自体において，「生来の知識」（'kynde knowynge'）という語句の由来をたどれば，Passus I での〈聖教会〉と Wil との対話の中で最初に用いられていることがわかる。Wil は〈聖教会〉から，魂の救済にとって神がいちばん大切であることを教えられ，

それと関連して「生来の知識」の重要性が浮かび上がる――

……従って，これらの聖句（「カエサルノモノハカエサルニ」と「神ハ愛」）をあかしにして既に申しましたように，すべての宝を試すと，〈真理〉こそが最高です。教育のある人々は知っていますから，無学な人々に，〈真理〉こそがこの世で最もすぐれた宝であると教えなさい。」

「しかし，私には〈生来の知識〉がありません」と私は言った。「それは私の体の中のどんな力によって，そしてどこで発生するのかをもっとよく教えてください。」

「あなたは何と愚かな人」と彼女（〈聖教会〉）が言った。「頭が鈍いわね。若い頃ほとんどラテン語を学ばなかったのですね。アア，私ハ青春時代ニ何ト無益ナ生活ヲ送ッタコトカ。あなたの心の中で，自分より大事にあなたの主を愛し，たとえ死ぬようなことがあっても決して罪源は犯さないことをあなたに教えるのが〈生来の知識〉です。……（Ⅰ．134-44）

神を「知る」とは「生来の知識」であるということ，つまり「生まれながら」持っている能力によって神を「知る」ことがいかに重要かということに彼は気付いている。しかしながら，この「生来の知識」が欠如しているという彼の告白は，彼が自分の体の中でその存在を意識できないことを意味する。彼はそのことを，「生来の知識は体の中のどんな力によって，そしてどこで発生するのか」という疑問の形で表現している。しかし，〈聖教会〉が「愚か者」と非難の返答をすることからわかるように，彼にそれが欠如しているのではなく，残念ながらその存在に気付かないだけだと思われる。すべての人がこの「生来の知識」を心に保持しているが，そのすべての人がそれを意識できるわけではない。その存在を意識できることが即ち神を「知る」ことであろう。〈聖教会〉はこの「生来の知識」についてもう少し詳しく説明する――

そして，愛を生まれながらに知ることは，神の力より起こる。そして心にはその源泉がある。というのは，心の中の〈生来の知識〉に，ある力が発生するからです。そしてその力は父なる神のものです。

父なる神は私たちすべてを造られ，愛をもって私たちを見つめ，私たちすべてを贖うため，私たちの罪のため御息子をおだやかに亡くされたのです。(I．163-68)

「生来の知識」の源泉の力とは神の力である。神によって我々すべては造られたのであるから，神の力である「生来の知識」はすべての人々が持っているものであり，それによりWilは神を「知り」，救済される。

『農夫ピアズの幻想』は，前半の*Visio*では，人間生活のより外面的で社会的な現実と，あるべき姿とが提示されている。それに対して，後半の*Vita*では，人間の内面的な神探求の姿が模索されているので，Wilに課せられた，「生来の知識」を引き起こす源泉の力とは何かという問題を解く鍵は，後半になって初めて与えられることになる。*Vita*に登場する擬人化された人物のうちで，〈思考〉，〈知性〉，〈勉学夫人〉，〈学識〉(Clergie)，〈聖書〉(Scripture)の一連となって姿を現す一団と，夢中夢(inner dream)の後に登場する〈予知力〉とは性格が異なることに注目しなければならない。前者の一団はWilに「学習」を教えたのに対して，〈予知力〉は一種の観想を教授する。このことに関してKaulbachは次のように述べている——

再開した外枠の夢（Passus XII）で，〈予知力〉は，Wilの知覚による経験から得た知識——〈思考〉，〈知性〉，〈勉学夫人〉，〈学識〉，〈聖書〉，その結果生じる欲望，そして〈自然〉における〈理性〉から学んだもの——を，救済に足りるDowelの自然的・超自然的知識に転向させる[17]。

夢中夢以前の第三の夢に登場する〈知性〉を始めとする人物たちは，五感によって得た「知」を表す。これが〈予知力〉によって初めて救済——Dowel——に必要な「知識」に変えられる。この二種類の知識は，アウグスチヌスが‘sapientia’（知恵）と‘scientia’（知）という語で区別する二種類の認識に当てはめられるであろう[18]。「知」が，「一時的なものの理性的認識」であり，学習とは知識のための行為であるのに対して，「知恵」は，「永遠的なものの知的認識」であり，キリスト教的愛によって神を知る観想である。〈勉学夫人〉を代表とする一団が「知」を，〈予

知力〉が「知恵」をそれぞれ表すと考えられる。〈勉学夫人〉らは，自由科（liberal arts）や肉体労働から神学へという，体系に従った学習をWilに教えようとした。しかしながら，このような学習は〈予知力〉の教える観想とはもちろん同一のものではない。Wilは結局〈勉学夫人〉の一団から,「生来の知識」の意味を充分習得できなかった。その結果〈予知力〉へ移行したと考えられる[19]。アヴィセンナが，五感から「想像力」へと上昇する魂の機能を述べたように，Wilは〈勉学夫人〉などから得た五感に基づく知識を「想像力」へと高めている。〈勉学夫人〉などから充分なDowelを得られなかったときのWilの精神的なより一層の混沌状態は，Passus XIの冒頭から始まり，〈予知力〉の登場を以て終る，夢中夢に表れているのではないかと思われる。Wilの求めている「生来の知識」は，〈勉学夫人〉が典型的に表した書物などからの知識を，〈予知力〉が示した，人間の中のより自然な「想像力」へと移行させて，神を認識することである。

Wilの夢中夢の直後登場する〈予知力〉は，300行近くのPassus XIIを長々とほとんど独りで話し通す。その中で，‘clergie’と‘kynde wit’という二つの用語によって，「想像力」の意味が，そしてさらに「生来の知識」の意味が，より明確になると思われる。

> あなたのことについて，このように言いましょう。あなたは，理由を求め，まるで非難するかのように〈理性〉と論議し，鳥や獣、またその繁殖の様子を知りたがりました。なぜある鳥は地面で子を産み，ある鳥は木の上で子を産むのかが，いわばあなたの知りたいことなのです。また，森の花々とその見事な色について，その明るくあざやかな色はどこから来るのか，さらに石や星についてもあなたは考えに考え抜いているように思われます。また，一体どうして獣や鳥はあれほどの強力な知恵を持っているのかも……
>
> 〈知識〉も〈生来の知恵〉もその理由を知ることはできないでしょう。ただ神御自身だけがその理由を知っておられます。（XII. 217-26）

> 〈知識〉と〈生来の知恵〉は観察と学習とから生まれる。聖書を読むことのできる人々にはその聖書が証明するように——私タチハ

知ッテイルコトヲ語リ，見タコトヲ証シシテイル。天の知識である〈知識〉は〈知っているもの〉から起こり，〈生来の知恵〉は〈見たもの〉から，つまり，いろいろな人々の観察から起こる。しかし恩寵は神の贈り物であり，大いなる愛から生まれるものです。学者もそれがどのように起こったかを知らず，〈生来の知恵〉もその進路を知らない。(XII. 64-69)

Wil の救済への道の第一歩は，神の造った自然——鳥や獣の生態にここでは象徴化されている——を，あるがままに見ることから始まる。彼は Passus X や夢中夢の中で，〈聖書〉や〈理性〉に干渉して，自然をあるがままに見なかった。このような Wil の失敗が結果的に，彼を正しい方向へと導く〈予知力〉の出現につながったと考えられる。ラテン語の「見たもの」(*quod vidimus*) と「知っているもの」(*quod scimus*) (XII. 66-67) ——「ヨハネによる福音書」3：11に由来する——とは，「生来の知識」を端的に言い表したものと解釈できる。彼は自然を理解することはできない。理解することは神への干渉であるから，理解するのではなく，五感——特に視覚——によってありのままの自然を知覚しなければならない。視覚によって自然を知覚して得るもの，即ち「見たもの」が「生来の知恵」(kynde wit) である。さらにこの「見たもの」を頭の中に保持したり，場合によっては好みに応じて組み立てたり，またあるいは五感では知覚できない「志向」を理解する，「生来の知恵」より上位の機能が「知っているもの」，即ち「知識」(clergie) である。しかし，この「生来の知恵」と「知識」は，神を「知る」うえでいかに高等なものであろうとも，人間の能力である以上，神を理解することのできるものではない。既に触れたアヴィセンナの魂の機能の分類を用いるならば，Wil が自然・神を「知る」とは，より五感に依存した「表象力」や「想像力」という下位の能力から，「想像能力」や「思考力」や「記憶力」という，将来の善悪を予言することのできるより上位の能力へ移ることと考えられる。

〈勉学夫人〉や〈聖書〉などによって表された自由科や神学の学習は，自然を見ることで得た「生来の知恵」と同種のものであると言える。前段落で 'clergie' を「知識」と翻訳したが，それは，書物などから得た「知」(science) とは全く異なるものであることに注意しなければならない

私たちの祖先は，子孫に教えるため，目にした不思議な光景をよく書き留めたものです。そして，それを知ることのできる自分たちの知恵を高等な知とみなしました。しかし，彼らの知によってどんな魂も救われたことはなく，また彼らの書物によって至福や喜びを与えられたこともないのです。というのは，彼らの〈生来の知識〉は，様々なものの観察によるにすぎないからです。

族長や予言者は彼らの知を非難し，彼らの言葉や知恵は全く愚かなことだと言い，キリストの知識と比べて，それをつまらないものと見做しました。コノ世ノ知恵ハ，神ノ前デハ愚カナモノ。(XII. 131-39a)

五感によって自然を知覚することにより得られる「生来の知恵」は，より上位の機能である「知識」へ高められない限り，救済とは無関係である。ラングランドはここで，そのような救済されなかった人々として，「知」だけを求めて，知的高慢の罪を犯してしまった過去の知識人を例に挙げている。自然の観察そのものは単なる「知」にすぎない。そのような「知」は救済に不充分なものであるばかりか，むしろ罪となる恐れがある。従って Wil はこの「知」あるいは「生来の知恵」という第一段階を経て，そこから生まれてくる第二段階である「知識」，即ち将来の善悪を判断できる能力へと到達しなければならない。外界で起こった出来事を「書き留める」ことによって得た「知」は，「キリストの知識」(clergie of Crist) とは異なるものである。「キリストの知識」によって人間は神を理解することは不可能であるが，神の存在を自分の内に感じることができるであろう。これによってこそ人間は救済されると思われる。

ラングランドは決して，五感を働かせることによって自然・神から得た「生来の知恵」，または書物などから習得した「知」そのものを否定するわけではない。ソロモンやアリストテレスなどの過去の知識人に言及して，それが金銭的貪欲や知的高慢と結び付いたときの危険性を指摘する。そのような「生来の知恵」と「知」は，最終的に「知識」に到達

する場合，不可欠なものである。例えば神学の研究者は聖書を研究することによって得た知識をもとに神を「知る」のであるから，「知」そのものはもちろん必要である。しかしながら，この作品では，「生来の知恵」や「知」それ自体が重要であるとは決して解釈されるべきではないと思われる。つまり，語り手 Wil をどう解釈するかという問題である。「人々で満ちた平らな野原」で，様々な人々の様子を見ている Wil は，農夫や聖職者や吟遊詩人などのあらゆる階層の人々を代表するとも考えられる。しかし，一般的に考えて，ラングランドがこの作品を書いた動機がそこからは見えて来ない。14世紀後半頃は各種の修道会に対する批判も多かった時代であることを考えると，Wil を万人のキリスト教徒と解釈するより，一般のキリスト教徒と区別して，何か修道士（monk）のような特定の階層の人々に限定してもよいのではないかと思われる[20]。この作品のアレゴリーは複雑で，言及も多岐にわたるため，肝心の Wil の性格がはっきりしない。従って，「生来の知識」と〈予知力〉の面からだけで論じることはできないが，全体として修道会の制度への批判が感じられる。修道士として Wil は，一般のキリスト教徒や神学者とは異なった方法の「生来の知識」――「生まれつきの知る力」による信仰――で神を「知る」必要がある。それは，自然を理解しようとするのではなく，自然をありのまま視覚によって見る能力，即ち「生来の知恵」から始まる。次に，それによって得たものを自分自身の中で分割させたり複合したりして，将来起こるであろう悪を避け，善に近づくための判断材料を作り出す。こうして最後に，その判断力を経験として，目に見えない超自然的な神を感じることができる予言的能力「知識」に至る。このように，「生来の知識」の持つ二つの相「生来の知恵」と「知識」は，アヴィセンナによる魂の機能のヒエラルキーの中の，「五感」から「想像力」へという上昇の体系と一致するであろう。Wil はこの「生来の知識」によってのみ救済され，至福を得ることができる。「生来の知識」は，「知」や「生来の知恵」から「キリストの知識」への移行を指している。擬人化されて登場する〈思考〉や〈勉学夫人〉の神探求のための勉強は，理性の行き過ぎという重大な弊害を生む可能性があるため，〈予知力〉（Imaginatif）自身が，理性ではなく信仰による救済の重要性を物語り，Wil の中の「理性的想像力」に訴えたのであろうと考えられる。

注

＊　本稿は1990年6月23日，鶴見大学で行われた日本中世英語英文学会東支部第6回研究発表会での口頭発表に加筆・修正したものである。

1)　本論で使用したテキストは，Schmidt 版のBテキスト（A. V. C. Schmidt, ed.: *William Langland: The Vision of Piers Plowman: A Critical Edition of the B-Text*. London: Dent, 2nd ed. 1987）.

2)　Mary Clemente Davlin: '*Kynde Knowyng* as a Major Theme in *Piers Plowman* B', *RES* n. s. 22（1971），1-19.

3)　M. C. Davlin: '*Kynde Knowyng* as a Middle English Equivalent for "Wisdom" in *Piers Plowman* B', *MÆ* 50（1981），5-17.

4)　Britton J. Harwood: 'Langland's *Kynde Knowyng* and the Quest for Christ', *Modern Philology* 80（1983），242-55.

5)　H. S. V. Jones: 'Imaginatif in *Piers Plowman*', *JEGP* 13（1914），583-88.

6)　B. J. Harwood: 'Imaginative in *Piers Plowman*', *MÆ* 44（1975），249-63.

7)　Alastair J. Minnis: 'Langland's Ymaginatif and Late-Medieval Theories of Imagination', E. S. Shaffer, ed.: *Comparative Criticism: A Yearbook* 3（Cambridge University Press, 1981），pp. 71-103.

8)　Ernest N. Kaulbach: 'The "Vis Imaginativa" and the Reasoning Powers of Ymaginatif in the B-Text of *Piers Plowman*', *JEGP* 84（1985），16-29; 'The "Vis Imaginativa Secundum Avicennam" and the Naturally Prophetic Powers of Ymaginatif in the B-Text of *Piers Plowman*', *JEGP* 86（1987），496-514.

9)　Phyllis Hodgson, ed.: *Deonis Hid Divinite and Other Treatises on Contemplative Prayer*（Oxford University Press, 1955（EETS os 231））.

10)　Migne, ed.: *Benjamin Minor*（*PL* 196, cols. 1-64）. Cf. Clare Kirchberger, trans.: *Richard of Saint-Victor: Selected Writings on Contemplation*（London: Faber, 1957）.

11)　Alastair J. Minnis は，'Affection and Imagination in "The Cloud of Unknowing" and Hilton's "Scale of Perfection"', *Traditio* 39（1983），323-66 の中で，神秘主義的観想のヒエラルキーに言及している。『不可知の雲』の作者も Hilton も，観想にとって「想像力」は必ずしも重要なものとは考えていない。少なくとも Hilton は，観想の最高の段階に達していない人が像を介して――想像力によって――神を知ることの必要性を認めている。しかしながら，対象とする読者が異なることにもよるが，『不可知の雲』の作者は観想に想像力は不要であるという立場である。もっと

も，この作品は，逆説的ではあるが形式として，「雲」や「闇」などの「ことば」という像を用いていることも事実である。

12) S. Van Riet and G. Verbeke, eds.: *Avicenna Latinus: Liber de anima seu sextus de naturalibus, IV-V* (Louvain: Editions Orientalistes, 1968). ここでは，Etienne Gilson: 'Les Sources Gréco-Arabes de l'Augustinisme Avicennisant', *Archives d'Histoire Doctrinale et Littéraire du Moyen Age* 4 (1929), 5-149を参照した。

13) アヴィセンナによる頭の機能の分類を表にすると以下のようになる。

魂 (anima)

理性的 (rationalis)　感覚的 (sensibilis)　自育的 (vegetabilis)

把捉 (apprehendens)　運動 (motiva)

外的把捉 (apprehendens e foris)

五感

内的把捉 (apprehendens ab intus)

表象力	想像力	想像能力	思考力	記憶力
(fantasia)	(imaginatio)	(vis imaginativa)	(cogitativa)	(memorialis)
			[評定力 (aestimativa)]	

14) グンディサリヌス訳を例にとれば，元来は 'imaginatio'/'vis imaginativa' の順序であったが，その用語の順序が入れ替わったり，本来は人間以外の動物に関する機能である 'aestimativa' が人間の機能となっているなど，主に用語上の若干の混乱がある。

15) Cicero: *De Oratore* II. 85. 357. Cf. Frances A. Yates: *The Art of Memory* (London: Routledge, 1984; 1st ed. 1966), p. 4.

16) Passus XI の「夢中夢」の中で Wil が出会う二人の美しい婦人のうちの一人 'Coveitise of Eighes' (〈目の欲望〉) は，五感の中の代表格である視覚を擬人化したものだと思われる。

17) Kaulbach: 'The "Vis Imaginativa Secundum Avicennam"', 500.

18) St Augustine: *De Trinitate* vol. 12 (*Opera Omnia* (Paris, 1837), Tom 8, col. 1404).

19) James Simpson は，'The Role of *Scientia* in *Piers Plowman*' (Gregory Kratzmann and James Simpson, eds.: *Medieval English Religious and Ethical Literature: Essays in Honour of G. H. Russell*, pp. 49-65) の中で次のように述べている。「〈勉学夫人〉が，Wil の終生の恩恵を受けたいという申し出を断ることからもわかるように，道徳的な理解にかかわる物事をより上位の教師にまかせることは，学問科目が持つ役割の，古典的・教父学的・後期中世的方式と一致する。つまり自由科が徳を教えることはいかに無力なことかということである。」(p. 57) 自由科を教える〈勉学夫人〉の役目には限度があり，より上位の〈学識〉や〈聖書〉によって初めて神学が教えられる。また一方，Harwood は 'orality' という新しい視点から〈勉学夫人〉を解釈している——'Dame Study and the Place of Orality in *Piere Plowman*', *ELH* 57 (1990), 1-17. 書物などから学ぶ神学ではなく，口頭で，話しことばによって学ぶ *lectio divina* の側面を〈勉学夫人〉は持っている。

20) Cf. Walter W. Skeat, ed.: *The Vision of William Concerning Piers the Plowman in Three Parallel Texts* (Oxford University Press, 1886), vol. 2, pp. xxxvii-xxxviii; Morton W. Bloomfield: *Piers Plowman as a Fourteenth-century Apocalypse* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1963), pp. 68-73.